

Dishonesty behaviors under time pressure

鶴田まなみ^a

要約

自己利益を得るために嘘をつくことは、様々な場面で見られる。また、嘘をつく状況も、すぐに嘘をつくか否か意思決定をしなければならない場合と、嘘をつくか否か決める際に時間的余裕がある場合の二つがある。時間制限がある場合、嘘は増加するのだろうか？それとも減少するのだろうか？それとも、嘘をつくかの意思決定に時間制限は関係ないのだろうか。本研究では、実験室実験を用いて、時間制限下の嘘行動の程度が異なるか否かを検証した。被験者が嘘をついているか否かが実験者にわからないタスクを用い、実験において嘘が可能か気づいていた被験者のみを用いて分析を行った。その結果、時間制限下と時間無制限下では嘘の程度の差がないことがわかった。また、時間制限下の秒数の違いにおいても、嘘の程度の差はなかった。

JEL 分類番号 : C91, D91, K42

キーワード : Time pressure, Dishonesty, Decision making, Laboratory experiment

^a 大阪大学経済学研究科 博士課程後期 u533820h@ecs.osaka-u.ac.jp

1. イントロダクション

嘘をつく行為は、様々な場面で見られる。企業の粉飾決算などの社会に多大な影響を及ぼす組織的な嘘行動から、個人の脱税などの嘘行動まで、様々な嘘を私たちはついている。なお、本研究での嘘行動とは、嘘をつくとき自己が利益を得る場合に、嘘をつく行為のことを指す。嘘をつくか否かの意思決定をする際には二つの状況が考えられる。一つは意思決定に時間制限が与えられている場合、もう一つは意思決定を行うのに十分な時間が与えられている場合である。例えば前者は、上司に急に呼び出された社員が、自身の仕事の進捗が遅れていることを隠すため嘘の進捗報告をすぐに報告する場合などがあり、後者は、空き巣にあった家主が、保険会社に被害金額を報告する際に書類提出までに時間があり、被害金額を多めに虚偽報告する場合などが考えられる。時間制限がある場合における嘘行動と、意思決定に時間制限がない場合における嘘行動の程度に違いはあるのだろうか。本研究の目的は、実験室実験によって、時間制限下の嘘行動に変化があるのかを検証することにある。

実験室実験による時間制限下の嘘行動の検証は、近年いくつか行われている (Capraro, 2017; Shalvi et al., 2012; Foester et al., 2013; Lorse et al., 2018)。先行研究には、大きく分けて二つの欠点がある。一つは、Lorse et al. (2018) が指摘しているように、実験参加者が意思決定をする際に、嘘が可能な選択問題であると気づいていたかが嘘行動を調査する実験では重要であるのに、Shalvi et al. (2012) と Foester et al. (2013) では不明である。例えば、筆記テスト中に、問題の答えが隣の席の答案用紙から見えた場合、以下の二つの場合があり得る。「問題の答えを見て、カンニングができる可能性に気づいた。カンニングするか否かの意思決定を行う。」「問題の答えを見たが、カンニングができるという可能性に思いもよらなかったので正直な選択しかできない。」本研究では嘘行動をするか否かの意思決定を検証したいので、後者の被験者をデータから除く必要がある。Lorse et al. (2018)の実験では、実験後質問紙において、実験において嘘が可能か気づいていたかの質問をしていた。彼らの結果は、すべての被験者サンプルでは時間制限下のほうが時間無制限よりも正直な選択が多いが、嘘が可能とわかっていた被験者に絞ると、正直な選択の差はなくなった。つまり、時間制限下では、単に被験者が嘘の選択が可能か気づく割合が少なく、正直な選択が多くなったということである。本実験でも Lorse et al. (2018)のように嘘が可能か気づいていたかを実験後質問紙で訊いた。時間制限下の嘘行動の先行研究の二つ目の欠点は、第一の欠点のない Capraro (2017) と Lorse et al. (2018)においてみられる。彼らは被験者の嘘行動が実験者にわかるようなタスクを用いている。自身が嘘をついた否かが実験者に知られることがわかるようなタスクであると、被験者は、実験者という他者の視線等を気にするかもしれない。他者の視線というのは嘘行動の研究において多く

なされており、嘘行動の程度を変化させる重要な要因である(e.g., Gneezy et al., 2018)。Capraro (2017)と Lorse et al. (2018)の研究において、この要因が時間制限下の嘘行動にどう影響しているかは不明である。Shalvi et al. (2012) と Foester et al. (2013)で用いられていたタスクは、第二の欠点がない、つまり、被験者が自身の嘘行動を実験者に知られることのないものである。よって、本研究では、実験後質問紙を用いて嘘が可能か気づいていた被験者を対象とし第一の欠点をなくし、Shalvi et al. (2012) と Foester et al. (2013)で用いられていたタスクを用いて第二の欠点をなくし、嘘行動の程度が時間制限下で変化するか否かをより正確に検証する。

2. 実験手順

嘘行動を計測するタスクは **Dice in cup** と呼ばれるもので、Fischbacher and Föllmi-Heusi (2013) が考案し、その後多くの嘘行動を計測する実験において採用されている。まず、被験者に六面サイコロが一つ入ったコップをひとりずつ配布する。被験者はカップを振り、中のサイコロを転がし、出たサイコロの目を見る。ここでサイコロはカップの中に入っており、被験者以外はサイコロの目を確認することはできない。その後、サイコロの目とそれに対応した報酬表が PC 画面上に提示され、出たサイコロの目を PC に入力してくださいという指示が出される。例えば、サイコロの1が出たら100円、2が出たら200円、3が出たら300円、4が出たら400円、5が出たら500円、6が出たら600円という報酬表が提示され、被験者が転がして出たサイコロの目が2だとする。この場合、被験者は正直にでたサイコロの目の2を入力すれば200円を得るが、嘘をついて6が出たと入力すれば600円を得ることができる。このタスクの最も優れている箇所は、個々の被験者が実験者に嘘行動をさとられる心配がないということである。カップの中のサイコロの目は被験者自身にしかわからない。つまり、他者の評判などを一切考慮せず、自己利益のために嘘をつくか否かの選択を被験者は行うことができる。実験者は、これらの被験者らが入力したサイコロの目のそれぞれの割合が、一様分布から逸脱しているか否かで嘘の入力があったかどうかを判別する。もし、被験者が全員サイコロの出た目を正直に入力していたなら、入力されたサイコロの目は、それぞれが $1/6$ の割合の一様分布となるはずである。しかし、被験者らが入力したサイコロの目の割合が一様分布になっておらず、高額報酬のサイコロの目の割合（前述の報酬表の例でいうと、サイコロの目が5、6）が $1/6$ よりも有意に高いと、被験者は出た目を正直に入力せずに嘘のサイコロの目を入力していた、とわかる。

実験は大阪大学社会経済研究所の実験室において、大阪大学の学生 121 人を対象にして行った。時間制限は5秒、10秒、20秒、30秒、時間無制限の5種類がある。それぞ

れのサイコロを振って出た目を報告するタスクを12ラウンドずつ行った。同じ時間制限状況を12ラウンド連続で行うわけではなく、どの時間制限がどの順番でくるかはランダムであるので、被験者は次のラウンドにどの時間制限になるかはわからない。被験者は合計60ラウンドを行った (i.e., 5種類の時間制限状況×12ラウンド)。実験後、質問紙により「出た目を正しく入力しなくてもよいことに気づいていた」という設問に答えてもらった。

3. 結果

実験後質問紙において「出た目を正しく入力しなくてもよいことに気づいていた」という設問に「いいえ」と答えた被験者は、121人中7名であった。図1は、この7名を除外し、嘘が可能であると気づいていた被験者のみの出た目の報告割合である。横軸は、サイコロの目と対応する報酬額の順位を表しており、実験手順セクションにおいて述べた、サイコロの目と対応する報酬の例で説明すると、最も金額が高い600円が得られるサイコロの目6を報告した場合は、横軸の順位は1となり、最も金額の低い100円が得られるサイコロの目1を報告した場合は6となる。「正直な場合」という線は、もしすべての被験者が正直に答えた場合の割合 (i.e., $1/6 \times 100 = 16.66\%$) を示すものである。

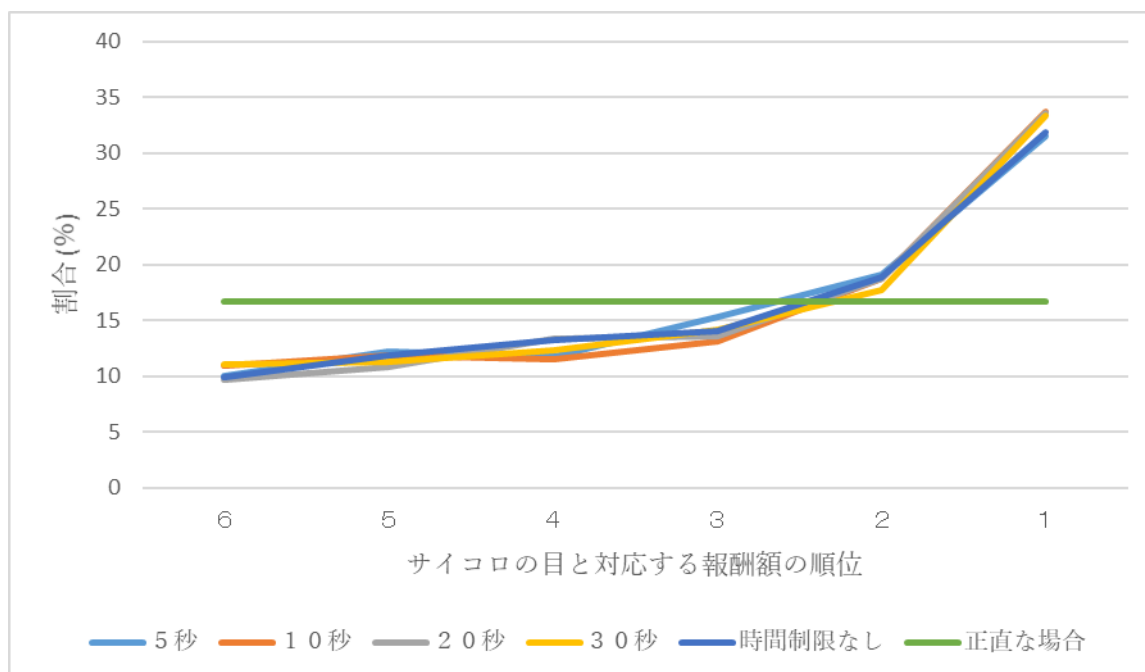


図1 嘘が可能であると気づいていた被験者のみの出た目の報告割合

図1をみると、どの時間制限下の状況においても、嘘の選択がみられることがわかる。

どの状況においても、最も報酬の高いサイコロの目を報告する割合が最も高い。

One-sample Kolmogorov-Smirnov test を用いて、それぞれの状況下の分布が一様分布と有意に異なるかを検定すると、すべての状況下において、有意に一様分布と異なる分布であり（すべて $p=0.000$ ）、すべての状況下で嘘の選択があったことがわかる。異なる時間制限下の分布の比較を Two-sample Kolmogorov-Smirnov test を用いて検定したところ、すべての組み合わせで分布は異ならないという結果が出た。つまり、時間制限の秒数の違いでも嘘の程度に差はなく、さらに、それぞれの秒数の時間制限下と時間無制限下においても、嘘の程度に差はない、という結果となった。

4. 結論

実験室実験を用いて、時間制限下の嘘行動の程度が異なるか否かを検証した。被験者が嘘をついているか否かが実験者にわからないタスクを用い、実験において嘘が可能か気づいていた被験者のみを用いて分析を行った。その結果、時間制限下と時間無制限下では嘘の程度の差がないことがわかった。これは Lorse et al. (2018) の結果と同様である。また、時間制限下の秒数の違いにおいても、嘘の程度の差はなかった。

引用文献

- Capraro, V., 2017. Does the truth come naturally? Time pressure increases honesty in one-shot deception games. *Economics Letters* 158, 54-57.
- Foerster, A., Pfister, R., Schmidts, C., Dignath, D., and Kunde, W., 2013. Honesty saves time (and justifications). *Frontiers in Psychology* 4 (473), 1-2.
- Fischbacher, U., and Föllmi-Heusi, F., 2013. Lies in disguise – an experimental study on cheating. *J. Eur. Econ. Assoc* 11 (3), 525-547.
- Gneezy, U., Kajackaite, A., and Sobel, J. 2018. Lying Aversion and the Size of the Lie. *American Economic Review* 108 (2), 419-53.
- Lohse, T., Simon, S.A., and Konrad, K.A., 2018. Deception under time pressure: Conscious decision or a problem of awareness? *Journal of Economic Behavior & Organization* 146, 31-42.
- Shalvi, S., Eldar, O., and Bereby-Meyer, Y., 2012. Honesty requires time (and lack of justifications). *Psychological Science* 23 (10), 1264-1270.